

【5】 考察と今後の課題

—— 授業づくり ——

《題材選定》

- ・今年度までの研究では教育課程を大きく変更することはなかったが、個や集団の特性を考え、教育課程や生活時間についても、研究テーマを基に、柔軟に考えていきたい。
- ・小学部では、年間の単元配置を大きく変更せず、繰り返しを大切にしているが、生活経験、楽しさの拡がりという観点から、新しい単元や題材への開発も考えたい。
- ・小学部から高等部までの児童生徒が一緒になって行う活動や行事においては、生活年齢・発達年齢、課題に大きな開きがあるため、題材の選定や運営の方法に一層の配慮が必要である。
- ・クラス単位での生活単元学習を多く取り入れたため、より個や発達段階、クラスの実態に応じた学習を展開することができた。16人のさまざまな段階、課題を抱える小学部の集団での合同学習の難しさを感じている。生活や学習場面の中でも、課題や障害によって、グループ分けをしたり、題材を変えたりといった柔軟な取り組みを考えたい。

《自己活動・思考の過程について》

- ・小学部の低い発達段階の児童や抱える障害の種類によっては、思考の過程が入りにくく恣意的行動に走りやすい者もいる。しかし、われわれはできるだけ子どもたちに寄り添いながら、思考の過程を経た自己活動を求めていきたい。
- ・1時間の授業の中で、自己活動や思考の過程を十分にさせようと思えば、一人ひとりの児童の内面や個性、障害、発達について理解していなければならない。自己選択を求めするためには、われわれ教師の提示の仕方、答えの求め方、選択肢の与え方も課題となる。児童の個性や障害、発達について理解する努力を怠らず、研究を進めていきたい。
- ・1時間の授業の中で、児童が十分満足感・成就感を味わえたかどうかは、どれだけ思考過程を経た自己活動が展開されたかともからめて評価すべきものである。時には、そのあたりをミクロに記録しながら見ていく必要がある。

《支援について》

- ・言語表出の乏しい児童の思考の過程をよみとることは難しい。時にはビデオにより、児童の反応を分析したりすることも必要である。また、われわれ教師は子どもたちの内面がよみとれる力量をつけていかねばならない。
- ・小学部の段階で、楽しい生活場面の繰り返しだけをねらうのではなく、「のりこえられる抵抗」、「ねばり強さ」も培っていくことが、将来の生活を楽しむ人間像に向かっていくことを押さえ、支援やゆさぶり、抵抗の与え方について今後一層研究を深めていきたい。
- ・教師が与える支援ばかりではなく、年齢が進むにつれて、集団の力を利用した支援も考えていきたい。

- ・小学部が「生活を楽しむための素地づくり」という立場にあるため、この研究で、児童の変容を求める直接的な評価は難しい。しかし、この取り組みの中で、自分の課題とぶつかりながら、それを乗り越えていく姿や、周囲の支援を受けながら、いきいきと活動する児童の姿を見つけることができた。ここでは、そういった姿を一部紹介したい。

・友だちとボール遊びができ、楽しみが広がっていったN男

自閉的傾向のN男の休憩時間の楽しみは、ビデオかワープロ打ちか新聞読み（野球、相撲、テレビ欄）であり、ひとりで熱中してするものの、いずれもひとり遊びで、広がりもなかった。ところが、教師と別の児童が楽しそうに野球をするのを見ていたN男は、（自分も野球に興味を持っていたのだろう）教師の誘いにすっと入ってきて、一緒に遊びだした。今では、以前没頭していたひとり遊びを止めてでも友だちの誘いにのり、二人でボール遊びを楽しむようになった。



野球って楽しいな

- ・ねばり強く挑戦して成功したことで自信をもち、生活全般にいきいきと取り組み出したC子

「さかだちができるようになりたい」というあこがれをもっていたC子は、教師や家族の励ましを受けながら、家でも学校でもねばり強く練習を続け、1か月半かかってようやくできるようになった。それまで、何事をするにもおどおどとして自信なさそうだったC子が、“頑張ればできそうなことに挑戦する→くじけそうになっても頑張る→できた時の喜びを味わう”という経験をすることで、大きな自信をつけ、それ以後いろいろなことにいきいきと取り組むことが多くなってきた。



さかだち、できたよ

- ・教師の支援によって自己矛盾を解決し、心の安定を見つけ出していくK男

自我と自己主張の矛盾拡大期にあるK男は、自我が押さえきれず、自分の思い通りにならないと激しく自己主張し、ふてくされたりやつあたりをしたり、活動を放棄することが多い。ところが、教師が本児の気持ちを汲み取って理由づけをしたり、一歩踏み込んで考えさせるための言葉かけをしたりすることで、K男は自分なりに「あとで」とか「これ嫌い」と理由をつけ、自分の中でこだわりを克服し、気持ちのもやもやを解決していく姿が見られるようになった。

- ・少しは自分なりに考えて選択し、活動に向かえるようになったM男

瞬間、瞬間の思いつきで行動し、選択肢を与え「どちらにする？」と選択をせまっても、何も考えずとっさに手を出したり、右にあるものを選んだりすることの多いM男だが、教師が選択肢の一つ一つについて「これは〇〇だね」と、選ぶための視点を

与えたり、実際に悩んでみせたりすることで、M男は、少し止まって考えたり、自分なりに選択して活動に向かえるようになった。

- 教師自身のなかに自己選択を大事にし、児童の自己活動を見つめようとする目が育ってきたように思う。また、「自己活動」、「思考の過程」という観点で、授業をよりミクロにみていこうとする姿勢も見られ始めた。

————— 全体をとおして —————

- 本テーマでの研究をとおして、一人ひとりの子どもの発達や障害、その子の個性や内面の心を理解することが最も大切であることを再確認した。今後も、個の実態を見据えながら、「題材の選定」や「支援」について考えていきたい。
- 「楽しみ」の価値観はさまざまであり、「楽しみ方」の評価をどうするか、「楽しみの拡がり」をどう評価するのか、今後の課題である。
- 学校でやったことや楽しい経験が、生活にも広がっていくためには、家庭との連携をもっと重視していかねばならない。
- 楽しめるものを増やし、定着させていくためには、「自由時間」、「クラブ活動の時間」「遊びの時間」も大切な場面であることを忘れず、より一層大切に扱い、指導していきたい。

(小坂)